

## 広重の旅と名所絵②

## 広重の江戸名所絵

江東区深川江戸資料館

文化8年(1811)、歌川<sup>うたがわひろしげ</sup>広重は幕臣として火消同心<sup>ひけしどうしん</sup>を本業としつつ、繊細な美人画を得意とした歌川<sup>うたがわひろしげ</sup>豊広<sup>とよひろ</sup>に入門しました。その後、文政6年(1823)に同心を隠居し、本格的に絵師としての道を歩み出します。

こうして制作された広重の作品は、膨大<sup>ぼうだい</sup>に残され、また海外へ流出してしまったものもあり、その全貌は把握しきれいていません。現在、確認されている江戸の名所絵に限定しても1,000点以上ですから、相当な数の作品を世に送り出していたことがわかります。

今回は、本格的に画業に取り組み始めてからの、広重の描いた江戸の名所絵を取り上げていきます。

## 1. 広重の描いた江戸の名所絵

ここでは、広重の代表的な江戸の名所絵を、いくつか紹介していききたいと思います。

【東都名所拾景】 版元：西村 版型：中判

年代：文政8年～天保2年(1825～1831)

全10点からなる作品。これまで描いていた美人画や挿絵から、風景画に取りかかった原点といわれます。広重のオリジナリティは、まだ見出せません。

【東都名所】 版元：川口正蔵 版型：大判横

年代：天保2～3年(1831～1832)

全10点の作品。「一幽齋」広重と名乗ってから初めて出されたものです。この時、新たな作品の試みとして、ペロ藍といわれた舶来の染料を取り入れています。また、遠近法を用いて、技法にも変化が見られ始めます。

【江戸名所張交図会】 版元：山本屋

版型：大判

年代：安政4年(1857)

全10点の作品。「東海道五十三次」の大ヒットから一躍有名となり、多くの名所絵を描く中で、この作品は数ヶ所の名所絵を張り交せて1枚の版画にしています。こうした試行錯誤された名所絵も作り出されていました。

【名所江戸百景】 版元：魚栄 版型：

大判

年代：安政3～5年(1856～1858)



図①

全118点(うち二代広重の作品と考えられているものもある)の膨大な作品群。広重最晩年の作品です。広重の独特な技法が見られ、近年高く評価されています(以後「江戸百」と表記)。

## 2. 江東区域を描いた名所絵から

広重は、江東区域の名所も多く描いており、中には、何度も繰り返し取り上げている名所もあります。江東区域に限ってみると、別表のようになり、特に亀戸界限の作品が多いことがわかります。

亀戸は、香取神社や常光寺など中世の創建伝承をもつ寺社のほか、亀戸天神社など、多くの寺社が集まる行楽地として、江戸庶民の注目を集めました。それぞれの寺社では、境内に季節の草花や樹木を植え、四季折々、それらをめでる人々で大変賑わい、特に亀戸天神社の

亀戸天神社	18
亀戸梅屋敷	16
富岡八幡宮	15
洲崎	14
洲崎潮干狩	8
永代橋佃島	7
亀戸	7
永代橋	4
大橋	4
五百羅漢さゞみ堂	4
中川・小名木川	4
洲崎弁財天	3
木場	2
三十三間堂	2
その他	16
合計	124

酒井雁高『広重 江戸風景版画大聚成』(小学館、1996)に所収された作品より、江東区のものだけを取り上げて作成。  
※ただし隅田川は除く。

藤、龍眼寺の萩などが有名でした。

また、寺社の境内ではありませんが、浅草埋堀(台東区)の商人、伊勢屋彦右衛門の別荘として開かれた梅屋敷がありました。そこには、龍が横たわっているように見える梅の名木「臥龍梅<sup>がりようばい</sup>」がありました。広重はこの梅屋敷だけでも16点の作品を描いています。

その中の一つ、「名所江戸百景」の「亀戸梅屋舗<sup>かめいどうめやしき</sup>」は、ゴッホも模写したことで知られ、広重の中でも傑作とされる作品です(図①)。

画面手前に、臥龍梅が大きく描かれ、その枝の間に梅屋敷の情景が描かれています。これは、近像型の構図であり、

広重が得意とした手法でした。

この他、梅屋敷を描いたものに、「江戸名所 亀戸梅屋舗」や団扇絵「亀戸小室井梅園」などがあります。これらは、梅屋敷という名所を描いていますが、全く異なる趣の作品になっています。このように、広重は同じ対象であっても、様々な手法によって描きわけており、その手法一つ一つに広重独自の創作性と芸術性の高さをみることができます。

### 3. 江戸名所絵の制作背景

広重は、数々の作品を制作するにあたって、実際に足を運んでスケッチしたり、あるいは種本を用いたとされています。江戸とその近郊の名所絵についても、その例外ではありません。

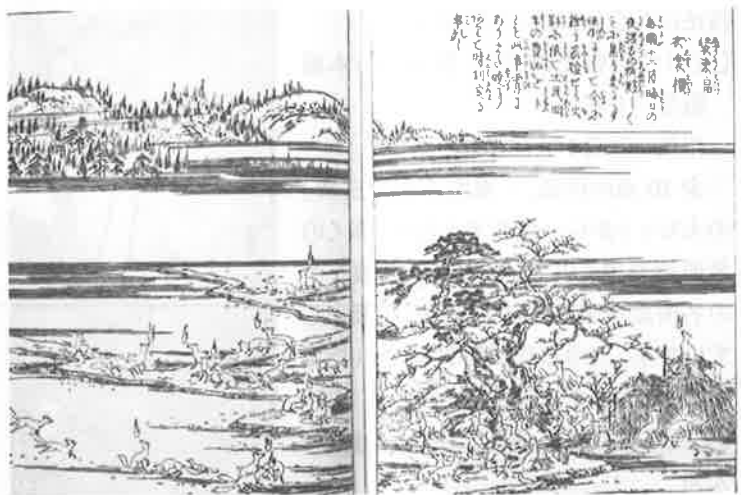
例えば、広重がスケッチしたとされるものに「江戸名所写生帖」（太田記念美術館蔵）があります。『太田記念美術館論集3』には詳細な報告があり、江戸の名所絵のスケッチ全103点が確認されています。これらのスケッチの中には、広重の代表的な作品である『絵本江戸土産』や「江戸百」と類似する構図の絵が含まれており、スケッチをもとに描かれた可能性も考えられるなど、その関連性が指摘されています。

一方、広重は江戸や江戸近郊を描く場合でも、実際に足を運んだスケッチだけでなく、種本を利用していたといわれています。

例えば、「江戸百」に描かれた「干子装束糸の木大晦日の狐火」（図②）は、『江戸名所図会』に所収された「装束畠 衣裳覆」（図③）と酷似しており、『江



図②



図③

戸名所図会』を参考にしながら創作されたものとみなすことができます。両者を比較してみると、『江戸名所図会』を元絵としながらも、<sup>たてえ</sup> 縦絵の構図をとるなど、広重独自の視点が感じられる作品です。

広重は、種本をもとにする場合や、同じ場所を何回も取り上げて描く場合、そのいずれにおいても、独自の構図や趣向をこらし、広重ならではの作品に仕上げているのです。

### 4. 江戸の名所絵から東京の名所絵へ

こうして、広重の江戸名所絵は、多くの庶民に受け入れられ、人気を博しました。しかし、幕末維新という変革期を経て、新しい時代「明治」を迎えると西洋文化の影響を強く受けて、名所絵は変化していきます。

例えば、絵のテーマに時事を積極的に取り上げるようになったこともその一つです。嘉永6年（1853）、ペリーが来航した際には、それを反映した「<sup>よこはまえ</sup> 横浜絵」が制作され、黒船や異人などが描かれました。また、明治維新を迎えると「<sup>かいかえ</sup> 開化絵」が流行し、洋装の男性や蒸気機関車、ガス灯などが描かれるようになりました。

さらに、色彩にも変化が見られます。安価な「洋赤」という染料を使用するようになり、それまでよりも濃厚で鮮明な赤を画中に取り入れるようになりました。

ほかにも、西洋風の写実性を取り入れた、<sup>こぼやしきよしか</sup> 小林清親に代表される「<sup>こうせんが</sup> 光線画」と呼ばれる手法があげられます。これは光と影を効果的に用いた技法で、海に映る月や、夜に浮かび上がるガス灯の明かりなどを写実的に描き、それらを木版画で成しえたところに芸術性の高さがありました。

このように、江戸から東京への変化とともに、浮世絵も変化していきました。印刷の技術によって大量生産ができるまで、浮世絵は大衆の心を掴み続けました。